

# 大気海洋研究所共同利用共同研究推進センターの活動

所属 大気海洋研究所 共同利用共同研究推進センター

○森山彰久、センター員

moriyama@aori.u-tokyo.ac.jp

## 1. 共同利用共同研究推進センター

2010年4月に旧海洋研究所と旧気候システム研究センターが統合して大気海洋研究所が発足した際に設置された。大気海洋研究所は共同利用・共同研究拠点として認可されており、その陸上研究施設や学術研究船（白鳳丸、新青丸）を用いた所内外の研究者の共同利用・共同研究に関する支援を行うとともに、新たな技術の導入・開発および研究施設等の管理・運用等を行うことを目的としている。沿岸研究推進室、陸上研究推進室、観測研究推進室、研究航海企画センターの4つの部署から構成され（図1）、大気海洋研究所の技術系職員（技術職員・研究支援推進員）はそのいずれかに所属している。なお、学術研究船は海洋研究開発機構の所属であるが、大気海洋研究所がその研究、観測に責任を持っている。

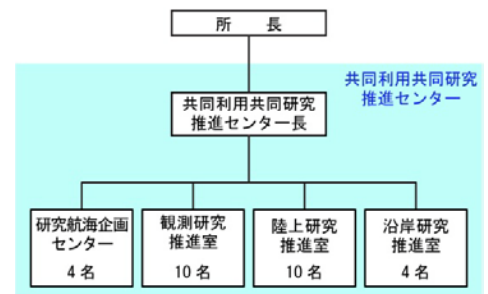


図1 共同利用共同研究推進センター組織

## 2-1. 研究航海企画センター

研究船共同利用運営委員会の決定に基づき学術研究船の研究航海計画を策定する。学術研究船の円滑かつ有意義な航海の実施のため、所内外の研究者、技術支援を行う観測研究推進室、学術研究船を共同運航する海洋研究開発機構や関係各省庁、漁業組合などの所外組織との連絡・調整を行う。研究航海に関する手続や準備（図2）は航海の1年以上前に開始される。他国の排他的経済水域内で観測する際のEEZ申請や航海打合せ等のマネジメント、経産省・都道府県・管轄魚連・各漁協への特別採捕許可申請や漁業調整などの申請手続きを行っている。

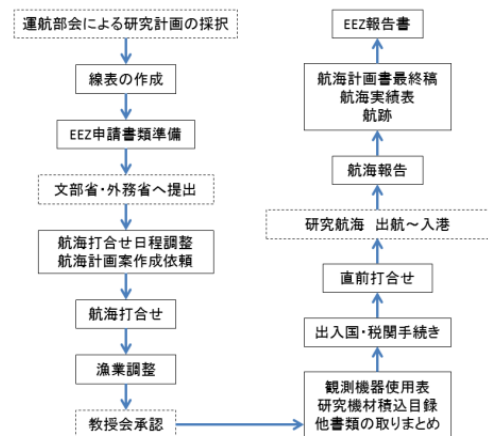


図2 研究航海に関する手続

## 2-2. 観測研究推進室

学術研究船白鳳丸、新青丸に乗船して共同利用観測機器の運用および取扱い指導など、航海全般にわたる海洋観測の支援を主業務とする（図3、図4）。陸上では共同利用観測機器および観測機器棟の保守管理や機器の改良・開発などを行っており、運航計画、ドック工事、共同利用観測機器の選定・購入・修理など、航海計画にも初期段階から携わっている。研究航海企画センターと協力して業務を行っている。2013年度には6回の白鳳丸研究航海（内航4、外航2；航海日数248日）が行われ、観測研究推進室職員はそれぞれ年間70～100日程度乗船している。また、新青丸は2013年6月に海洋研究開発機構に引き渡され、試験航海の後に、同年12月に研究航海を開始している。



図3 船上作業の様子



図4 白鳳丸（左）と新青丸（右）

## 2-3. 陸上研究推進室

大気海洋研究所に設けられた共通実験施設および、施設内に配備された機器の稼働・保守管理をおこなう。図 5 に示す施設に加え、物理・化学・生物・地学の実験系施設および計算機・ネットワークなど計 14 施設が管理対象で、その管理方法は施設ごと、装置ごとに多岐にわたっている。さらには、全国から訪れる共同利用者に対する技術協力、大学院生への技術指導、技術開発研究へも積極的に注力し、新技術の導入や多様なニーズへの対応を通じ大気海洋研究所の研究活動の向上に貢献している。



図 5 陸上共通実験施設（一部）

## 2-4. 沿岸研究推進室

大気海洋研究所の附属研究施設として岩手県大槌町に置かれている全国共同利用施設「国際沿岸海洋研究センター」に設置されている。同センターに来所する全国の研究者に対して、施設や設備を提供し、船艇を用いた調査の支援をおこなっている。同センターの施設は東日本大震災で壊滅的な被害を受けたが、現在はその一部を復旧させ、研究者の受け入れを再開している。また、2013年11月12日に調査船「弥生」（図 6）の進水式が行われ、船艇数は震災前と同じく 4 艘に回復した。船艇稼働実績も震災前に匹敵する量に戻りつつある。



図 6 調査船「弥生」

## 3. 課題と展望

共同利用共同研究推進センターは 2010 年に旧海洋研究所が柏に移転し、旧気候システム研究センターと統合された際に設置された。海洋研究所時代、技術系職員は各研究室や共通施設に分散して配属されていたが、技術系職員が一つの組織にまとまることにより、お互いの仕事を知る機会が増え、情報の共有がなされ、技術職員間のサポート体制もできつつある。今後はさらに 4 部署間の連携を深めていきたい。一方、研究室から離れたことにより、研究室の教員や学生と一緒に作業をすることが少なくなったとの意見を聞くこともある。利用者の要望を受け取る機会を増やすとともに、職員それぞれがどんな技術を持っており、研究に対しどのような貢献ができるか、利用者への説明会やホームページ等を利用して、わかりやすくアピールしていく。大気海洋研究所ではアウトリーチ活動にも力を入れており、センターでは施設見学対応などで協力しているが、これからも社会とのつながりを大事にしたい。研究に用いる技術は常に更新され多様化していく。そうした新しい技術の要求に答えていくためには、技術開発や技術習得の努力を続けていくことが必要である。技術系職員と研究者とが一緒になり、求めるべき技術やその開発の方向性などを議論する、そのような共同利用共同研究推進センターを目指していきたい。